

江戸時代人の見た富士

石川 博 (甲府クラブ)



その1

先日、小笠原諸島と平泉が世界遺産に登録されたが、「富士」はいまだに登録されていない。しかし行政も手をこまぬいているわけではない。山梨県では細々とではあるが、富士をめぐる宗教や美術や文学について調査を行っている。その中で、小生は江戸時代の文学に記された富士について担当しており、この場を借りてそのいくつかを紹介したい。

まず、富士山がある日突然出来た、という伝承がある。時は孝霊天皇5年、近江の国が大きく陥没し琵琶湖となり、同時に富士山が盛り上がったのだという。さすがに本気で信じていた様子はないが、川柳ではしばしばこの伝承を詠んでいる。

- ① 孝霊五あおむく者に覗く者
- ② 打ち出でて見ればびっくり孝霊五
- ③ 実語教孝霊五より前の作

①は、富士を見上げる者と琵琶湖を覗き見る者。②は山辺赤人の「田子の浦に打ち出でてみれば…」をふまえている。③はちょっと解釈が必要だろう。「実語教」は寺子屋で学ぶ初心者向けの教科書。その冒頭に「山高きが故に尊からず、樹あるをもって尊しとなす」とあり、誰もが暗記していた。しかし、富士山は高くてなおかつ尊い山なのだから、この一節のある「実語教」は富士山がまだなかった頃、出来たのだろうと。

このように富士山は、高さに加えて偉大な山だという認識があった。もう2つ川柳を記す。

- ④ 富士山と並ぶは親の恩ばかり
- ⑤ 三国はものかは天下一の山

今では、富士は日本一というのが相場だろうが、江戸時代にはしばしば三国一と言われた。⑤はさらに三国どころか、天下一だと誇っている。さて上記5句のうち、「富士」という語を使っているのは④だけ。川柳の面白さは、このように主題を間接的に詠み込むところにもある。

(甲府クラブブリテン:2011年7月号)

江戸時代人の見た富士

その2

富士山が水面に映ることがあり、逆さ富士などとも呼ばれる。田子の浦や富士五湖が有名だが、江戸時代の地誌によれば、甲府にも伝承がある。

一つは、甲府城(舞鶴城)の堀で、「追手堀には富士の姿が映るが他の山は映らない」と記録されている。もう一つは、甲府駅の北東にある大泉寺の池。「信玄誕生の時、この池に富士の姿が映った」とか「国に異変があるときには富士の姿が映る」などとある。ことに注目するのは「甲斐国志」に「時ありて土峰寒影の写るところなり」と記されていることだ。「土峰」とは富士山のこと、「寒影」とは冬の姿の意味であろう。

さて、ここに挙げるのは葛飾北斎の富嶽三十六景の中の一枚、「三坂水面」である。



三坂は御坂のこと。河口湖に映る富士を描いているが、地上の富士は夏の姿なのに、水面の富士は冬の姿なのである。これまでこの浮世絵は「奇異にすぎる」、「北斎の奇抜な発想と構想力がよく現れている」等と評されてきたが、上記の「甲斐国志」の記述と重ねれば、水面に富士山の冬の姿が映ることは、それほど奇異ではなく、伝承を踏まえたものと理解できる。

富士に限らず、水面に「実物とは違う姿」が映るという話は多い。「八犬伝」では、伏姫が水たまりに映った自分の姿が犬であることに驚くし、酒呑童子系の説話では、茨木童子が水面に映った自らを見て、自分が鬼になったことをさとする場面がある。これらは真の姿が水面に映るという伝承があったことを示す。富士山の真の姿(富士山らしい姿)とは雪の積もった姿だろう。当時「夏の富士」という語は、比喩的に「化粧しない素顔」の意味で用いられたくらいだ。

大泉寺の伝承も、北斎の絵も、富士山の真の姿が水面に映ることを表している。特に北斎の絵では、地上の富士の方がむしろ異様だ。夏でもこの絵のように地肌が黄土色には見えない。この富嶽三十六景は、他にも写生とは思えない富士が多いが、それも北斎の魅力だ。

江戸時代人の見た富士

その3

江戸時代になると、実物の富士を見て歌に詠んだり句をつくったりする。当然なことのようにだが、実はそれ以前の富士の和歌はほとんど現地を見ずに作られていた。富士に限らず、「歌人は居ながらにして名所を知る」と言われるくらい京都の貴族たちは想像の上で歌を詠んでいたのである。しかし江戸からは、富士が遠望できる。ここに挙げたのは、広重の「駿河町之図」という浮世絵で、現在の日本橋室町にあたる地域を描いている。道の両側に三井越後屋(現在の三越)、正面に富士がそびえる。

この絵の光景そのままの川柳がある。「富士山をついたてにする駿河町」というものだ。この三幅対のような眺めも、「富士曇る日は呉服屋も二幅対」となる。さらに雨が降ると、越後屋では店の名前を大きく書いた傘を通行人に貸した。

「富士山が見えて唐傘みな帰り」となる。江戸から富士が見えるのだから富士からも見えるはず。「富士へ登って越後屋はどこだろう」というとぼけた川柳もある。



さて、この光景、偶然にしては出来すぎではな

いだろうか。

江戸は自然発生した都市ではない。何もないと
ころに都市を造る場合、京都のような、方角に正
確な基盤の目の町を設計するのがむしろ自然だ
ろう。ここは東西から20度ほど傾いている。しかも
富士だけではなく、下町からは筑波山がやはり
正面に見えるのである。江戸の町割は天正期に
行われている。その際の資料は残されていない
ので推測になるが、富士を見るために江戸の町
割が設計されたという説は魅力的だ。

(甲府クラブブリテン:2011年9月号)

江戸時代人の見た富士

その4

大田^{なんぼ}南畝は、「唐人もここまでござれ天の原
三国一の富士が見たくば」と詠んだ。世界一の
富士山をみたかったら、中国人も日本まで来い、
という狂歌だ。戯作者の式亭三馬も「唐土へ見
ゆると聞けば富士の山我が日の本の鼻の高さよ」
と富士山を<自慢>している。

銅版画で有名な画家、司馬江漢は、「この山
の形は世界中にない。元市場というところで、
富士山の版画をオランダ人が何枚も買う」と、
外国人も評価していることを記録している。他
にも日本に来た中国人や琉球の使節団が富士を
讃えたという記録が江戸時代にはい
くつもある。明治以降、富士山が世界に誇る日
本の象徴だと広く主張される下地が、江戸時代
には既にできていたのだ。

「鞭^{べんせい}声^{せい}肅々〜」と始まる川中島一騎討ちの漢詩
でも有名な頼山陽は、中国の崑崙^{こんろん}山と富士山を
比べる詩を作っている。「帝、芙蓉の雪を掬^{すく}い、

抛^{なげう}って崑崙の山を作る。雪汁は即^{すなわ}ち黄河。
また東海に向って還^{かえ}る。」

(読み下し文、「芙蓉」は富士山の別名) 天の
神様は、富士山の雪をすくって中国に投げ、崑
崙山を作った。その雪が解けて黄河となった。
それが日本海に流れ込んで日本に還ってくる、
という詩である。中国では伝説の山の崑崙だっ
て、富士山から見ればほんの小さな
ものさ、と自慢する。この詩は秋山玉山の「芙
蓉峰を望む」という詩(こちらでは、富士山が
崑崙山から作られた、と詠んでいる)を元にし
た笑いを取る詩だが、この詩が作られた背景に
は、富士は世界一の山だ、という共通の認識が
ある。

現実の崑崙山脈は、中国の西部にある3000キ
ロにも及ぶ大山脈で、標高6000メートル以上の
山が200峰以上も連なっている。言うまでもなく
富士山をはるかに凌ぐ大きさだ。

(甲府クラブブリテン:2011年10月号)